

四季折々の風を感じる秋保。

今に至る二口街道や二口峠を初めて越えた人は誰なんだろうか…。

仙台から山形へ、最短ルートとして江戸時代に発達・活躍した二口街道は、古くは山寺を開いた(860年)慈覚大師円仁が越えたことが由来と伝わります。今は県道62号線がそのほとんどを継承していますが、当時の様相を想像すると、名取川に沿って、道幅の狭い鬱蒼と茂る樹木の中を、川越えや峠越えの難所を踏破しながら、歩いたものなのでしょう。

慈覚大師円仁ゆかりのお寺(抜粋)

828年 松島延福寺(瑞巖寺)の創建

850年 平泉中尊寺の建立

860年 宝珠山立石寺(山寺)を開山

秋保

秋保古道

あきういにしえのみち

いってみっぺ
秋保

あきういにしえのみち

秋保古道

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市
連絡先：秋保総合支所総務課(022-399-2111)
秋保市民センター(022-399-2316)

川越え・峠越え、山寺とつながる秋保の古道
慈覚大師円仁の難所越えの物語を想像しながら
古道の雰囲気が漂う道のを訪ね
当時の思いを感じてみませんか

訪れてみたい秋保
二口街道ツアー 62

No.34

掲載されている情報は、令和3年3月現在のものです。

藩政時代の二口街道は、仙台と最上(山形)を往来するたくさんの人々に利用されました。当時は奥州街道から山形城下へ向かう道路は、作並街道(関山峠越え)、二口街道(二口峠越え)、笹谷街道(笹谷峠越え)の三つのルートがありましたが、記録には二口街道ルートが最短であったことから一番往来が多いと記されています。宮城からは出羽三山参りや、仙台湾の海産物を運ぶ商人が日常的に利用していたとされ、その証として二口峠には「塩釜大明神」の石碑や、出羽三山の石碑などが残されています。

また、その一端として往来が多かったのが、作並街道の上愛子(道六神)から板蕨峠を越えて境野に入り二口街道と合流する板蕨峠道でした。

明治となり馬車の往来ができるようになった関山トンネルが完成すると、二口峠越え街道はその役割を終えるに至りましたが、板蕨峠道は、秋保から仙台方面への最短路として、昭和の前半まで使われました。その面影は随所に見られ、静かに時を刻んでいます。



4 白沢峠越え・大雲寺峠越え

青葉区白沢と野中を結ぶ旧白沢峠道から分岐し、加沢ため池、大雲寺を通して加沢・馬場とを結ぶ、白沢経由愛子方面と二口街道(馬場)をつなぐ古い道です。戦国時代の秋保氏が、馬場秋保氏を分家割譲した頃にはあったと云われ、秋保郷北側の軍事勢力に備えた遺構などを残しています。藩政時代、勾配の緩やかな境野の板風峠や野中とをつなぐ旧白沢峠の往来が多くなるにつれ、山仕事のみの利用となり衰退をたどりましたが、二口街道の脇路線として重責を担った歴史があり、往時の雰囲気を残しています。

※整備が行き届いていない部分もありますので、案内者同行がおすすめです。



2 源兵衛原～橋本の越え場

秋保温泉と境野とをつなぐ二口街道は、現在神ヶ根温泉手前を羽山橋経由で結ばれています。かつてこのエリアは羽山権現を中心とした修験の聖地として、容易に通行することはできなかったと云われています。ゆえに街道の本線は木の家ロッジ村の西端から名取川へ降り浅瀬を歩いて対岸へ渡り、坂を上って橋本の水田地帯から、県道沿いにある石塔群がある辻へと向かう道であったと思われます。橋のない時代の人々の苦労がしのべれます。また、秋保温泉と湯向・太夫地区を結ぶ道は、昔は湯の橋はありませんでした。湯で唯一古くから橋が架けられていた頭橋を渡るか、川越えをするしかありませんでした。茶寮宗園の西側付近から名取川へ降り、川を渡って湯向へ上がるのがその越え場で、ホテルクレセントの北側から行沢、太夫、橋本へとつながるルートでした。



※木の家は民間施設です。河岸の見学には入場料が伴います。

秋保古街道 (川越え・峠越え編)



古道の面影が残る土路、静かで心が癒されます。



大倉山、楯山、大東岳が見える風景

3 板風峠越え・瀬沢の急坂

二口街道は、長町方面から秋保温泉、境野、長袋を通して馬場、野尻、二口越えとなるのが、原型ですが、伊達氏の仙台藩開府以降は、仙台山形間の往来が盛んになり、更なる最短路線として発達したのが、愛子方面と二口街道をつなぐ板風峠越え道です。仙台城下を出発した商人や旅人の最初の難所がこの峠と云われ、今もこの古街道沿いには、石碑や人馬が往来した痕跡があり、往時を垣間見ることができます。静かなその空間には、馬喰の叫ぶ馬子唄が聞こえて来そうな雰囲気があります。

また、仙台城下を出発した旅人たちの最初の休憩場所だったのが、検断(番所機能を持つ)があった長袋町集落です。しかしその手前には急坂の瀬沢の坂があり、難所としても知られました。取り分け降雪時は、人馬共に厳しくその苦労は大きかったと伝わります。人馬の息遣いが感じられる古道の雰囲気が漂っています。



「越え場」とは？

名取川と並走する二口街道は、崖や急斜面に接する場所では通行が難しくなり、その手前で川幅の狭い浅瀬を歩いて又は丸木橋を架けて川を渡っていました。このような場所を「越え場」と呼びます。



1 松場～除の越え場

長町・生田方面から秋保温泉へ入るには、洞窟堂山(ホテル瑞鳳北側・秋保石探掘地)と名取川磊々峡の間の道を通るのが一般的ですが、古は洞窟堂山の断崖が磊々峡まで落ち込み、険しい崖のため人の往来は出来なかったと云われ、明治から大正にかけて秋保石の採掘とともに道が開拓され今に至ると伝わります。故に古の街道は、松場地区(秋保温泉郷こけし塔手前)から名取川へ降り、川の浅瀬を歩いてホテル華の湯の東側(水道管下の河原付近)に渡り、旧除屋敷の前を通って秋保温泉中心部へと通じていました。着物のすそをまくり上げながら渡る人々の姿を想像することができます。

